

証言その時々

大岡昇平



証言その時々

大岡昇平

筑摩書房

証言その時々

一九八七年七月三十日 初版第一刷発行

著 者 大岡昇平

発行者 関根栄郷

発行所 筑摩書房

〒一〇一 東京都千代田区神田小川町二一八

振替 東京六一四一二三

電話 営業〇三一二九一七六五

編集〇三一二九四一六七一一

印刷 明和印刷

製 本 積信堂

©Shohei Ooka 1987 Printed in Japan

ISBN 4-480-82233-X C0095

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

大岡昇平（おおおか しょうへい）

一九〇九年東京に生れる。京都大学仏文科卒。作家。小説『俘虜記』『野火』『武蔵野夫人』『酸素』『花影』『レイテ戦記』『幼年』『少年』『ながい旅』『天誅組』他。評論及びエッセイ『在りしの歌』『朝の歌』『昭和文学への証言』『コルシカ紀行』『私自身への証言』『文学の可能性』『女性と文学の誕生』『わがスタンダード』他。中央公論社版『大岡昇平全集』（全15巻）、岩波書店版『大岡昇平集』（全18巻）。

証言その時々

目次

武藤貞一『戦争』	3
チャーチル『世界大戦』	5
武藤貞一『日支事変と次に来るもの』	11
俘虜記(抄)	14
チャーチル『第二次世界大戦回顧録』	28
記録文学について	30
『裸者と死者』	35
二万人の死者より二十人の生者を	39
白地に赤く	41
作家の日記(抄)	43
ルバング島を思う	55
ルバング島の日本兵	57
某月某日	61

戦争の思い出 64

「ニュールンベルグ裁判」を見て 69

私と戦争 75

紀元節の思い出 78

民の声と「大国」の利害 82

二十年後 88

この八月十五日 91

日本人とは何か 95

ビートルズとデモの間にて 99

フィリピン紀行 104

なぜ戦記を書くか 113

八月十五日 118

人間差別がたどる運命 122

東風西風（抄） 133

肉体は脆いもの 141

フィリピンと私 145

六十三、四の正月 152

グアム島の証人 155

時間 159

サクラとイチョウ 162

ルバング島の兵士たち 175

私の中の日本人 184

ベトナムのこと 190

妄想的な現実 194

第二の戦後か 198

ルバング島の悲劇 205

戦後文学の二十九年 220

戦後三十年 225

視点(抄) 233

私と戦争 235

三十三年目の夏 239

へんな夏 243

成城だより(抄) 246

三十八年目の八月に 249

一兵卒として 265

成城だより II(抄) 270

『レイテ戦記』を直す 273

狡猾になろう 278

戦後四十年を問う 283

悪夢の構図 293

成城だより III (抄)

296

河口湖日記 (抄) 298

あとがき 303

証言その時々

武藤貞一『戦争』

『文学界』一九三七年四月号

この本の第一の特徴はよく売れたといふことである。こゝ三ヶ月許りの間に十万売れたと聞いた。話半分と見ても、当時さして有名でなかつた著者と、この版元では異常な成績といつていゝだらう。

国家は準戦時体制の下に入らうとしてゐた、国民の戦争への関心は高まりつゝあつた、といへば理由は簡単であるが、戦争の危機は今日始つたことではない。四、五年来所謂戦争物は巷間に溢れてゐたのであるが、この本ほど売れたといふ話を聞かない。

所謂戦争物が、多く最新兵器や各国軍備や未来戦などの読者の好奇心を釣る叙述に終始したのに反し、この本が戦争の惨禍と「戦争を指駭する」軍需工業家のインチキを摘発してゐる点に、はつきりとした特色が現れてゐる。

ところ／＼叙述がごたごたして、種本の雑多と混乱を思はせるところがあるが、解説として一応まとまりもよく、文体も平易で読み易い。

材料は今から二十年前「貪婪にして残忍なる」白色人種が、地球のあちら側でいがみ合つた歐洲大戦に取られた。未来の戦争は二十年前の戦争より一層残酷である筈だと例証されてゐるが、黄色人種の軍需工業家が白色人種の軍需工業家より一層道德的であるとは書かれてゐない。

「私は敢然戦争を警告する」「これをしも非戦論と云ふならば、私はその岌々として国を過まらうとする一知半解の徒の迫害の下に炮烙の刑も敢て辞する者ではない」

兎に角著者は炮烙の刑にも遇はず、発禁の厄も脱れて『戦争』は十万売れた。所謂国民の「総意」に沿ふところがあつたからかも知れぬ。

十萬位の数で「総意」を云々するのは滑稽かも知れぬ。十万といふのがそもそも噂である。では僕はこゝにもう一つの噂を紹介する。その噂といふのは、最近国民の「総意」と支持を受けながら内閣が組織出来なかつた有名な陸軍大將がこの本を読んで、「ほう、戦争とはかういふものかね」と感心した、といふのである。

陸軍大將ともあらうものが巷間の通俗戦争解説書に書いてあることぐらゐ知らない筈がない、だからこの噂は嘘にきまつてゐる。が、噂といふものが噂する当人の願望の一部を反映するものとすれば、この噂の意味は、わが信頼する大將に戦争の惨禍を知つて置いて貰ひたい、といふ「総意」の反映と見られぬこともない。「大將よ、一知半解の徒と与するなかれ、避けるべきものは避けて下さい」。大將も『戦争』も「総意」の支持を受けつづけるであらう。(宇佐美出版事務

所刊)

チャーチル『世界大戦』

『文学界』一九三七年六月号

僕は一種の色眼鏡をもつてこの本を読んだ。そして最後まで色眼鏡をはぶす必要を認めなかった。

エドワード八世の退位に際してボールドウィンに対してこの本の著者が行つた陰謀は、愚昧な君主と確執を生じた首相としてボールドウィンのとつた態度が、一点の非の打つ処のないものであつたに比較して憎むべきものと見えた。チャーチルは多分一個の政治家として擱むべき機会を擱んだにすぎなかつたらう。同盟通信齋すところの God save the King の看板をさげてロンドンの街を闊歩する女の写真は、今世紀の最も醜惡な風景の一つと映つた。

チャーチルは一九一一年海軍大臣就任、一五年ダダネルス攻撃の失敗の責を負つて辞任した。大戦当時から執筆されてゐたといふ本書が、單なる歴史的興味の外に弁解的意義を持つたことは疑ひを容れぬ。弁解的な或ひは宣伝的な動機の下に十年間の公務の余暇を殆どこの八巻の著作にあてた。君子国日本では想像を絶した事実かも知れぬ。が、ヨオロッパはかうした野心と知的操

作の結合の例をふんだんに提供してゐる。

描かれた対象が世界大戦といふ偉大なる事件であり、われわれが普及版でその詳細な歴史に触れる機会がなかつたことを思へば、何にしてもまづこの本に対する尊敬は失はれてはならぬ。が、その尊敬とこの本の細部をいちいち承認するといふことは別である。

大戦勃発当時は海軍大臣、一九一七年には軍需大臣だつたチャーチルは、大戦の事実について、殊に雲霧に閉された上層部の事実について、最もよく語り得る者の一人であらう。が、彼がすべてを率直に語る気を起す必要はなかつた。

例へば次の欺瞞的叙述を見よ。

「当時（勃発当時）フランス艦隊は全部地中海にあつて、僅かに少数の巡洋艦と哨艦とがフランスの北方及び大西洋岸を防衛するために残つてゐるに過ぎなかつた。このフランス艦隊の地中海集中といふ事実を考慮に置いて為されたわけではないが、当時我々は戦艦全部を母国に集結してゐて、唯巡洋艦と巡洋戦艦だけが地中海に於ける私権保護に當つてゐるに過ぎなかつた。（中略）我々が、言質を与へたとか与へなかつたとかの論議を別として云々」これはたゞ兩國が完全に手を握つてゐたといふだけの話ではないか。

彼は戦前のイギリスの政治的分野のエキスを試み、アイルランド問題に「無意味」な闘争をことゝしてゐる議會を憂へたが、宣戦布告と共に内閣を去つた閣僚の行動と意見については殆ど語らなかつた。たゞ一九一〇年内務大臣在任中「いち早くも」火薬庫の軍隊による警備を要請したほど敏感だつた帝国主義者チャーチル卿が、「何とも知れぬ大きな力に動かされて」軍令部長

と共に作戦計画を練り、万事遺漏なくやつてゐたことを語るにすぎぬ。

大戦中に活躍したイギリス地方軍の忠誠の勇気を歎賞するとき、彼は極右保守党の領袖として、彼の党の政治的地盤に頗る忠実だった。

オーストリア旧帝国の雜人種軍隊を撃退した少数のセルビア軍の愛国心は激賞されたが、同国に送られた三国協商国の優秀な大砲については語られなかった。

一九一四年十二月八日、南米チリ沖で英国南遣艦隊を破り、アフリカ沿岸にゐると予想されてゐたドイツ東洋艦隊が何故かフォークランド島の無電所を襲撃して待機中のイギリス弩級艦に撃滅された。邦訳『世界大戦』第一巻挿入の予告では、英海軍省がドイツスパイに発した偽電報によることになつてゐるが、該当巻のチャーチルの本文にはただ「不明の理由によつて」と書かれてゐる。ドイツの暗号電報を尽く解読してゐた秘密室については、いづれドガーバンク海戦の時に、大艦隊出動の理由を明かすために後になつて報告しなければならなかつたが、かゝる「卑劣」の印象を与えるおそれのある事実を記載するよりは、海軍大臣たる彼の意に反して弩級艦二隻を本艦隊からさいいた提督の英断を称賛する屈辱の方を彼は選んだのである。細部に於ける多少の嘘は止むを得ぬ、誰でも利害を持つてゐる、と人はいふかも知れぬ。では、僕は利害による欺瞞と並んで誤つた歴史観から来る大局的な欺瞞、或ひはチャーチルの自己欺瞞について書く。

一九一四年九月六日退却に退却を続けたジョッフルが廻れ右をし、マルヌ河畔で五十五個師団の英仏連合軍が七十八個師団のドイツ軍と対面した。戦闘の結果は勝敗いづれとも決しなかつたが、とにかく決定的勝利を得てフランス軍をスイス国境に追込むドイツの殲滅戦術はこゝに挫折

した。有名なマルヌの会戦である。

チャーチルはいふ。モルトケは誤を冒した。「かの『勝利の処方箋』たるシュリーフェン計画は、フランス軍のみに九十七個師団を對抗、そのうちの七十一個師団を以て、ベルギー經由の大攻勢旋回運動を敢行する決心であつた。然るにモルトケは西部戦線に於て十九個師団を減じ、大攻勢旋回運動に十六個師団を除き、更にまたこれより二軍団（四個師団）を控除し、これを東部戦線に輸送した」シュリーフェン計画に従つてさへゐれば、大旋回運動の右翼はバリの北部を蔽ひ、フォン・クリュック軍は右側をモウヌウリー軍に衝かれることなく、従つてイギリス軍の進出を許した致命的なビュロー軍との間隙は生じなかつた。また東部戦線に送られた二軍団さへあればこの間隙は埋められることが出来た。モルトケはたゞ大モルトケの甥といふにすぎず、カイゼルに取入ることが巧みなおべつか使ひにすぎなかつた、と。

すべて事後の批判がかうしたものであるにせよ、これ以上莫迦げた批判は考へることが出来ない。死せるシュリーフェンを持上げ、生けるモルトケを貶すことは一般に容易である。が、生けるモルトケは生けるドイツの現実に生きて、生ける動員組織の限界と、生ける東部戦線の圧迫を持つた筈である。あらゆる作戦計画は可能である。が戦争が始まる時は「もう少し待て」を許さないし、始められた以上は現在の能力の範囲で可及的努力を試みるほかはない。モルトケの逡巡を笑ふチャーチル自身、当時海軍の逡巡に向けられた非難に対して、あらゆる零細な報告、覚書を聚めて現に弁解の一本を著はしつつあるではないか。

誤つた歴史観は次の如くなると更に重大である。曰く、かくして「殆どその発端で、陸上での